

いしかれん だより 第2号

昭和63年12月15日発行

発行人 宮保勇夫

編集人 林久夫

発行所 石川県精神障害者

家族会連合会

われわれの課題

石川県精神障害者家族会連合会

会長 宮保勇夫

「ともに生き ともに歩む 社会に向かって」が、今度の第21回全国大会のテーマであったことは、皆さんご承知のことと思います。そして、これは、まことに胸をうつ感激的な言葉だということができるでしょう。しかし、この言葉についての、人々の思いは必ずしも同じでないかもしれません。それは、このテーマを具体的に推進しようとすると、われわれはいろいろな問題に行き当たるからだと思います。

まず、「ともに生きる」というためには、障害のある人もない人も、平等に生きる権利が保障されることが、前提でありましょう。すなわち、患者、障害者の自由権、生活権、その他の基本的権利を実現し、擁護することが、第一に重要な問題であると思います。

次に、社会の中での「差別」をなくすることは、法律だけで解決することは難しいけれども、法令の中の精神障害者に対する欠格条項の是正は速やかに実現しなければなりません。この中に「人格権」を侵し、不当に「勤労の権利」を制限するものが多いですから、精神障害者の社会復帰を妨げ、その自立を困難にする大きな要因と思われます。差別の問題は、昭和61年7月25日の公衆衛生審議会の「精神障害者の社会復帰に関する意見」にもあるとおり、国、地方公共団体等が、まず第一に、精神疾患や精神障害者等に対する誤解や偏見等をなくすることに努めねばならないものと思います。

福祉の問題についても、法律がなければ、国も地方公共団体もなかなか動いてくれません。法律をつくるためには、まず、社会的、政治的キャンペーンに、われわれの全力を投入すべきであると思います。

全家連全国大会の報告

石家連常務理事 林 久夫

第21回全国精神障害者家族大会は、去る11月18日、19日と二日間、山口県山口市民会館大ホールで開催されました。石家連から会員の方、事務局など11名が参加致しました。18日の午後から4分科会があり、第1は「市民の理解」、第2「社会復帰施設」、第3「作業所」、第4「家族会」でした。参加した会員の方はそれぞれ思い通りの分科会に参加しました。

19日の大会式典には、南は沖縄、北は北海道と全国から1500人が集まりました。午前中は4名の講師による公開座談会で、「経過の長い精神障害者の治療と支援活動」のテーマでした。その後、発表者の各氏に参加した家族の方から、自分の息子・娘について質問がいくつか出ましたが、時間の都合等で回答は表面的なもので終わりました。

午後から式典が始まり盛大に行われ、主催者挨拶、来賓祝辞と続きました。厚生大臣を初め6名の祝辞を賜りました。なかでも、参議院議員社会労働委員会の八代英太先生の励ましの祝辞は会場の皆

さんの感動を呼びました。

記念講演は「遠く長い道一つなかりを求めて」と言う演題で講師は劇作家の田中澄江先生でした。身体障害者の2人の娘、息子の世話をしている話で、特に娘さんの場合は結婚して子供も生まれ、幸福な生活を送っていた矢先、事故の為障害者になったとのことで、その心の痛手は大きかったようです。その痛手の中から、親として自分の体が潰れるまで、2人の子供と娘の孫の世話をしなければならぬとの気持ちと現在に至るまでの苦労を語られました。淡々とした話し方であったことが、却って会場の参加者に強い感動を呼び起こすものでした。

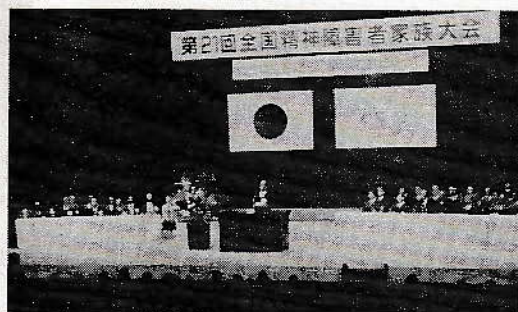
田中先生は80歳を越す年齢でありながら現在でも2人の生活の支えるために自分の体を鍛えることを考え、また趣味として、年に何回か山登りを行っていることにも驚かされました。

大会は概ね、以上のような状況ですが「ともに生き ともに歩む 社会に向かって」を体験する為にも次回は多くの会員の皆さんが参加されるよう願います。

全家連理事長表彰を受けて

のぞみ会会長 東中 幸作

去る11月19日の山口市に於いて、全国精神障害者家族大会が開催され、その際、私も表彰の光栄に浴しました。永年に亘って活動を続けた業績によるものとの事です、私自身を顧みると恐縮の至りで全く皆様方の広大な御陰によるものと深く感謝しております。



今回の全国大会に参加して、今後の課題とし、努力しなければならない第1は会員の増加と組織の強化を図り、力強い運動を展開すること、第2は障害者の治療と支援活動を進める態勢を一層強化せねばならないことを強く感じました。家族会は障害者に対する理解に一層積極的に取り組み、共同作業所等の社会復帰施設を作り、生活と労働と学習と憩いの場を保障すると共に障害者が社会の中で生活しやすい暖かな人間関係を作ることが急務であることを痛感しました。

全国大会に「はじめて参加」して

しらぎく会副会長 池本 祐次

去る11月19日宮保会長以下11名で、全国精神障害者家族大会に参加したが、会場入口でまづ、盛大な雰囲気圧倒された。全国各都道府県から参集した1500名の家族は、真剣そのものである。陳列された婦人服、子供服等、授産施設で作られた数々、誠に立派な品物であるやれば出来る心意気がうかがわれる。ブロック別分科会では、私は、福祉法の創立、声を大にして発言する内容に是非

保健法の次は「福祉法」と協賛である。力を結集して行動しなければ、県へ国へ八代英太参議院議員が、まづ身を以って率先している。全国から集った立派な活動家には本当に頭の下る思いがした。

「遠く長い道、つながりを求めて」田中澄江さんの講演には、出る涙を抑え切れず、あらためて、子供たち、親兄弟のために何とかしなければと、思いを一つにする参加者一同であった。

＊＊家族会だより＊＊

☆ 輪水会から

輪水会会長 土井 源次郎

地域家族会輪水会は48年度以来、保健所の御協力を得て、毎月定例会を開いて家族としての対応を話し、励まし合ってきた。互いの発言について参考にし、家庭に閉じこもって心配ばかりしていたのでは得る事もできない、悩んでいるのは自分ばかりではないとの思いが少しずつ会員の家庭を明るくするのに役立った様に思う。

62年6月石川県精神障害者家族会連合会主催の「厚生部長との座談会」の席で、厚生部長より小規模作業所に向けて、まずはどこかで何かをして動き出してほしい、三人でも五人でもよい、皆さんが動き出したら、支援をするとの回答があった。そこで7月の輪水会定例会で作業所づくりにどう取り組むかのテーマで話し合った。家族でどこまで出来るか、定例会でも集まりの悪い家族会にとって、作業所を管理していけるか。そうした不安が会員から、出された。しかし、本人にとって気晴らしができ、家から一歩でもでて交流の出来る場所としての作業所は定例会参加者の願いであった。

そこでまずは、多くの家族の入会をすすめ、地域の理解を得ることを当面の目標となった。ちらしを作成し、バザーを開いて、家族会の趣旨を広め、作業所開所三年後の実現を目指すこととなった。

第一回のバザーは63年3月、輪島地区公民館を借りて実施した。多数の市民の協力もあってバザーは成功であった。当日の売り上げは11万余円だった。

第二回のバザーは63年4月、青年会議所主催「三万五千人の広場」に出店した。バザーは大勢の市民に精神障害者の理解を得ることに役立ったと思われる。

去る11月30日、社会福祉協議会で身障者精薄者の家族代表と話し合いをもった。今後輪島の総ての障害者と手をつなぎ、組織を作って、悩み事に協同で対処しよう話し合った。未だ序の口だが、精神障害者の社会参加に努力していきたい。

一編集後記一

第2号は全国大会の特集とし、参加された方々に寄稿願いました。次号は 明年7月の予定です。皆様ご意見、ご投稿をお寄せください。